

# 父子および母子三者間相互交渉における 子どもの会話参加能力<sup>(1)</sup>

加須屋裕子・上村佳世子\*・濱部浩一\*\*

## Abstract

The current study investigated the nature of conversational interaction in a mother-child-sibling and father-child-sibling triad, focusing on the development of a second-born child's pragmatic skills over the course of the third year. The child focused on was 2;5 and 2;11 at the time of collecting discourse samples at home and the sibling was 3 years and 11 months older. Analyses revealed that triadic interactions were, on average, nearly twice as long as dyadic interactions and elicited more child turns per conversation than in dyadic interactions. The child was capable of joining in ongoing conversational interactions between other persons and the proportional frequency of the child's participation (e. g., Joining discussion of a topic, Changing the topic, Initiating a topic) increased with age. Different maternal and paternal interaction styles were observed; for instance, the mother took a turn speaking on the child's topic nearly all the time while the father did so on half of the child's attempts. These results suggest that the mother-child-sibling and father-child-sibling interactive contexts differ in important ways from each other and from the parent-child dyadic context. The findings also suggest that these triadic interactions may give a child a richer language learning environment for promoting child language socialization.

**Key Words** : triadic interaction, language development, early childhood, language socialization

---

**A toddler's ability to enter into ongoing mother-sibling and father-sibling conversational interactions**

\* Hiroko Kasuya・Kayoko Uemura \*\* Hirokazu Hamabe (日本獣医畜産大学運動科学教室)

(1)本研究の実施にあたり、平成11年度文京女子大学人間学部共同研究助成金の援助を受けた。

Correspondence Address: Faculty of Human Studies, Bunkyo Women's University,  
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533,  
Japan.

Accepted October 18, 2000.

Published December 20, 2000.

## はじめに

子どもは、両親をはじめとする、その時々子どもがおかれている周囲の環境からの言語情報を基に言語体系を作り上げていく。幼児への言語入力に関する研究は、“baby talk”を取り上げた Brown and Bellugi (1964) をはじめとして、母子関係をあつかった Snow and Ferguson (1977) の研究や、近年では Gallaway and Richards (1994) が子どもに対することばかけの特徴やその効果を多様な場面で記述しているなど、30年以上の歴史をもつ。

しかしながら、これらの研究で分析されてきたデータは、ほとんどが母子間または父子間といったような二者会話から引き出されたものであった。これは、ほとんどの研究が西洋の中流階級の家族を対象にしていたことが原因の1つであろう。ところがその他の文化圏では、多くの子どもは何人かのきょうだいの中で成長するため、現実には子どもは自分が直接的に参加する以外に、親ときょうだい間の会話を間接的に聴取するなど、多様なレベルの会話に接することになる (Ochs, 1982, 1986; Schieffelin, 1986)。また、現代の多くの子どもたちは、一日の大半を幼稚園や保育園の中で他の子どもたちと共に過ごす環境にある。たとえ一人っ子であっても親、きょうだい以外にも、他の子どもや教師との相互交渉に参加することが要請される場面におかれている。子どもたちがこのような環境にあるにもかかわらず、少数の研究 (e. g., Dunn & Shatz, 1989; Bartton & Tomasello, 1991) 以外は、複数の話者が存在する中での子どもの会話参加能力については言及していない。これは、子どもが他者の会話にどのように参加し、話題を持続することができるようになるかといった、語用論的能力の発達や言語的社会化 (language socialization) の発達を理解する上で、きわめて重要な問題と言える。そこで本研究では、ある日本人家族の中での三者間会話を2時点で比較することにより、この語用論的能力の発達に関する問題をあつかっていくことにする。

親と複数の子どもとの言語的なやりとりに関する先行研究では、上のきょうだいの参加が母と下の子どもとの相互交渉を大きく変化させるという報告がなされている (Jones & Adamson, 1987; Woollett, 1986)。例えば、きょうだいの参加が母親の全体の発話数、下の子への応答数、下の子の発話数をいずれも減少させるというものである。さらに、母ときょうだいとの相互交渉のほうが、下の子との場合よりも格段に量が多いという報告もある。これらの結果は、第2子以降の子どもは、第1子とは異なる言語環境にさらされていることを暗示している。しかしながら、このような異なる言語環境が言語発達にどのような影響を及ぼすのかについては、十分に解明されているわけではない。ここで、1つ注意しておかなければならないのは、これらの結果はすべて純粋な言語学的能力 (例えば、発話数、単語数など) についてであって、言語使用に関するものではないということである。この他にも、母と上のきょうだいとの会話を聴く機会が、子どもの言語発達に影響することを論じた研究もある。例えば、Oshima-

Takane (1988) や Oshima-Takane, Goodz, and Derevensky (1996) は、そのような会話が英語の人称代名詞 (e. g., I and You) の獲得を促進する言語的モデルを提供すると述べている。

最近の研究では、多数話者による相互交渉環境への参加経験が、子どもの言語使用の発達を促進することが示唆されている (Strapp, 1999; Mannle & Tomasello, 1987)。前述の結果とは異なり、これらの研究の中で注目されたのは、文法や使用言語数などの言語学的スキルよりも、語用論的スキルに関するものであったということである。現在では、多くの研究者たちが、子どもたちがいる状況で適切な単語を使えなければ、知識としての単語数の多さに意味はないであろうし、また、会話中での文章の使い方や、異なる会話能力をもつ聞き手に応じた文章作成ができなければ、複雑な文章が創作できてもほとんど価値がないことを十分に理解している (Ninio & Snow, 1996)。換言すれば、Barton and Tomasello (1994) が述べているように、子どもの構造言語学的能力は語用論的、または会話能力の文脈の中でのみ、その機能的意味をもつと考えられるのである。

語用論的能力におよぼす多数話者でつくる会話環境は、そこに参加する個人に多様なコミュニケーションの機会や、他者間で展開する会話に新たに参加するための練習の場を与えるもので、これは単純な二者間では経験することのない刺激状況である。Dunn and Shatz (1989) は、2歳から3歳までの6時点டுத்தデータを基に、対象児が母ときょうだいとの会話を理解しそこに参加できるようになっていく過程を、会話への介入の質の違い (intrusion with either relevant or non-relevant) に焦点を絞って研究した。その結果、子どもの会話が月齢とともに明らかに増加し、自分に向けられていない他者の会話に対する理解能力も、言語発達に重要な役割を果たすことが明らかになった。また、Barton and Tomasello (1991) は、19か月時の幼児が母子三者間の会話に参加することができ、さらに母子三者間では、二者間でのほぼ3倍もの会話交代がみられ、参加者それぞれの発話数も多いことを明らかにした。ただし、この結果をみるにあたっては、観察が大学のプレイルームで新奇のおもちゃを刺激材料として提示するという手続でおこなわれたことを、割り引いてみていく必要がある。

このように、多数話者による会話場面で獲得される語用論的スキルについての数少ない研究をみてきたが、そのいずれもが母子三者間の会話データソースとなっている。父親や祖父母を含む、主たる養育者以外による研究がほとんどないのは、データ収集が困難であることや、母子会話と質的な違いがないと想定して、わざわざみる価値がないと考えられてきたなどの理由もあるが、子どもの家庭での言語環境では、そうした第三者からの言語入力機会も多く存在することは事実である。しかも、子どもにとって母親とは質の異なる役割をもつと考えられる、父親やその他のおとなからの影響があるという現実を考えると、やはりそれらを検討せずに子どもの言語学習、特に語用論的発達を十分に語ることはできないのではないだろうか。例えば、二者間でみた父子のかかわりは、母親と比較すると時間的な量の少なさを補うような、または時間的な量では測ることのできない質的な価値や機能をもつことが、これまでにもいくつか報告されている (Goodz, 1989, 1994; Mannle & Tomasello, 1987)。Mannle and

Tomasello (1987) の研究では、子どもが父親またはきょうだいと話す際は、母親に対してよりも、相手に自分の意思を伝えるために多様な言語的スキルを駆使することが要求されると報告している。上村・加須屋・濱部 (1999) の研究も、父子相互交渉の中で子どもは父親の複数の働きかけスタイルに接し、ウチとソトの世界のはしご掛けの機会を与えるという父親の役割を示唆している。これは、子どもの要求を十分すぎるほど察して対応してくれる母親とは、まったく異なる言語環境を提供していると考えられる。

以上のことから、母子、父子、きょうだい二者間相互交渉の質的な差に関する研究はかなりなされており、さらに数は少ないものの、母子三者間会話（例えば、母一兄一子）については言語学的観点からも語用論的観点からも研究が進んでいることがわかる。しかしながら、父子をはじめとする第三のおとなを含む三者間における相互交渉過程そのものや、子どもの言語発達に影響をおよぼす母親の機能との違いについては、ほとんど研究がなされていない。そこで本研究は、父親が2人の子どもに接する際の相互交渉スタイルは、母親のスタイルとはどのように違うのか、さらにそのような文脈で、子どもが父親（または母親）と上のきょうだいの会話に参入するためのスキルは、どのように発達するかを明らかにすることを目的とする。そのために、2歳5か月時と2歳11か月時の2時点において、父子三者間と母子三者間の会話過程を検討する。

## 方 法

### 被観察者

対象は、都内在住の2歳代の男児たくや（仮名）で、本研究の観察時の2時点の年齢は、2歳5か月と2歳11か月であった。家族構成は、両親と兄（3歳10か月年長）の4人家族である。2歳代のこの2時点を分析対象にした理由は、3歳前のこの時期はとくに他者を理解することに興味をもち始める時期であり、他者間での会話にうまく参加するための基礎的なスキルの獲得も、この時期に観察されると考えたからである。

### 観察方法

対象児の父親に、対象児が7か月時より毎月1回（基本的には毎月第1日曜日）の頻度で、午後7時前後より2時間にわたりVTRカメラを設置し、食事を含む家庭での家族の社会的相互交渉の記録を依頼した。カメラを録画状態にして居間全体を撮影できる場所に設置し、対象者の観察が不可能な状態になる場合（例えば、対象児が観察場面を5分間以上離れる、眠るなど）以外は、2時間そのままにしてもらうよう依頼した。観察者は、VTR記録を通して対象者の間接的な観察をおこなった。

### 分析手順

VTR記録から、対象者の発話および非言語行動に関するトランスクリプトを作成し、さら

にトランスクリプトとVTR記録から、分析対象となる場面を選択した。対象場面の選択基準は、対象児、父親ないしは母親と、兄の三者間相互交渉が5分間以上続き、その間は発話のない時間が10秒以上続かないこと、さらに、父子および母子のやりとりの特徴を明確にするために、観察対象とならないいずれかの親が不在であることとした。この基準に基づいて、親子三者間の5分間のやりとりとして、2歳5か月時には自由遊び場面の中で対象児が兄とテレビゲームをしており、父親はすぐそばで新聞を読みながら2人の子どもにかかわる場面と、対象児と母親がクリスマスプレゼントについて話をしており、すぐそばで兄がテレビゲームをしながら2人のやりとりに参加する場面を取り上げた。2歳11か月時にはおやつを食べる場面の中で、父子三者がたこ焼きを食べながらたこ焼きの味や食べ方について話をする場面と、二皿目のたこ焼きを2人の子どもが食べながら、その世話をする母親に、父親の食べ方を報告する場面を、それぞれ分析対象場面とした。

### 発話のコーディング

**会話話題の同定：**三者間相互交渉の全体的な会話構成をみるために、会話行動の査定をおこなった。まず、「会話」とは、同じ話題を共有する少なくとも1発話以上をもつ、二者または三者間の一連の発話もしくは行動的なやりとりと定義した。そのやりとりが社会的相互交渉としての機能を果たすと判断される基準として、少なくとも一人が他者の会話参加を、適切な発話、うなずき、ジェスチャー、音声、アイコンタクトなどの、観察可能な反応によって応答するものであることとした。「会話話題」とは、その場面で取り上げられる会話の内容と定義した。これは、「色当てゲームの赤」や「運動会でもらった賞品」といったように特定されるものから、「本読み」や「ビデオゲームの内容」のように全般的なものまである。とくに、2歳11か月時は、観察場面がおやつのたこ焼きを食べている場面であったため、たこ焼きについての細かい副題、例えば、「何個めのたこ焼きか」や「ソースがついてない」などをそれぞれの話題とみなした。

トランスクリプト作成にあたって、発話の抑揚や、ポーズの有無を手がかりとして1発話ごとにあらわし、その後話題ごとに会話の区切りを同定した。同じ話題を共有する会話タイプはそれぞれの三者間相互交渉で4つあり、例えば、母子三者間では、母—子、母—きょうだい、母—子—きょうだい、子—きょうだいとなる。それぞれの会話タイプ内での参加者ごとの平均発話数と、それを合計した全体発話数が算出された。なお、誰にも向けられていない独り言として発せられ、応答のなかった発話は、会話タイプの分析からは除外したが、次の会話交代のタイプには含めて考えた。

**たくやの会話参加：**対象児たくやの擬態語と聴取不可能な発話を除くすべての発話を、話題維持という観点からコーディングをおこなった。その際に、Barton and Tomasello (1991)のカテゴリを参考にして、たくやの会話における貢献度と他者の受入に関して(1)発話交代のタイプ、(2)成功率の2つのレベルにおいてコーディングをおこなった。

(1) 発話交代のタイプ たくやの発話を次の4つのカテゴリに分類した。

- (a) Initiate Topic (話題の開始) : たくやの発話が前の人の話題とは異なる新しい話題で始まるもの。この場合、通常は前の人の発話や話題との間に十分なポーズがある。
- (b) Change Topic (話題の転換) : 前の人の発話がたくや以外に向かって発せられたものであり、たくやの発話は進行中の話題と関連がないものである。
- (c) Join Topic (話題への加入) : たくやの発話がすでに話されている話題に関連していて、話題の維持に貢献できるもの。
- (d) Continue Topic (話題の維持) : 上記のカテゴリには該当しないもので、ほとんどがたくや(または2人の子ども)に向けて発せられた発話の応答である。
- (2) 成功率 発話交代のタイプの3つ(a)話題の開始, (b)話題の転換, (c)話題への加入に対する次の話者の応答を、次の2つのカテゴリに分類し、他者間の会話を理解した上での参加なのか、または自己中心的な加入であるのかという観点から、(a)、(b)を合わせたものと、(c)における成功率を算出した。
- (a) Success : 少なくとも1人が、たくやの発話に対して適切な応答をしたり、次の発話でそのことに言及した場合。
- (b) Not Success : たくやの発話を誰も取り上げなかったり無視したりした場合。
- カテゴリのコーディングの信頼性をみるために、トランスクリプトの半数を2名の評定者でコーディングし、その一致率を計算したところ、会話交代のタイプの一致率は .83、 $k$  値では .74であった。

## 結 果

### 会話タイプ

母子三者間における参加者それぞれの平均会話交代数、会話タイプのカテゴリの全交代数に対する割合などの結果を2歳6か月(Time 1)、2歳11か月(Time 2)の2時点の観察時ごとにまとめたのが、Table 1とTable 3である。父子三者間については同様に、Table 2とTable 4に示した。

まず、母がどのタイプ発話においても子どもより交代数が多いことがTable 1に示されている。これは、母が会話を誘導したり発展させて子どもの興味を維持していることを示しており、後で示す例(Example 1)でも同様のことがわかる。会話のタイプ別でみると、三者間が一番多く(58.7%)、母一きょうだい間会話が一番少ない(10.9%)ことがわかる。ただし、母一きょうだい間では、1つの話題で長い会話が維持されている(平均会話交代数は15)。それに対して、たくやと母との間では異なった話題についての短い会話(平均会話交代数8.4)が多く生起しており、2歳5か月時には同じ話題を維持することはまだ難しいことが推測される。さらに、たくやの会話加入について注目すべき点は、三者間での会話(交代数81)が二者

**Table 1** Mean number of participant turns as a function of conversation type in a Mother-Child-Sibling triad at Time 1

Participant Turns	Conversation Types*		
	Mother-Child (Range)	Mother-Sibling (Range)	Mother-Child-Sibling (Range)
Mother	4.6(2-7)	8(8)	6.3(2-11)
Child	3.8(2-5)		4.3(3-6)
Sibling		7(7)	2.8(1-5)
Total Average length (in turns)	8.4 (42 turns/5 topics)	15 (15 turns/1 topic)	13.5 (81 turns/6 topics)
%	30.4%	10.9%	58.7%

Child=a Focused Child-Sibling=an Elder Brother

\*There was no Child-Sibling dyadic conversation.

**Table 2** Mean number of participant turns as a function of conversation type in a Father-Child-Sibling triad at Time 1

Participant Turns	Conversation Types			
	Father-Child	Father-Sibling	Father-Child-Sibling	Child-Sibling
Father	5(5)	9(9)	3.7(3-4)	
Child	3(3)		3.7(1-7)	22(22)
Sibling		8(8)	4.0(1-9)	31(31)
Total Average length (in turns)	8 (8 turns/1 topic)	17 (17 turns/1 topic)	11.3 (34 turns/3 topics)	53 (53 turns/1 topic)
%	7.1%	15.2%	30.4%	47.3%

間での会話（交代数42）よりも、全体で約2倍の長さになっていることである。さらに、たくやの平均会話交代数も、三者間（交代数4.3）のほうが二者間（交代数3.8）より多くなっている。ここでも、三者間が作り出すダイナミックスが作用していると考えられる。これは、後の例（Example 5）でもみることができる。

Table 2に示されている父子三者間相互交渉の特徴は、母子との場合でまったくなかったきょうだい間の会話が約半数も生起したということである。ここには、子どもたちが遊んでいるのをみながら必要な時に声をかけるという父親の態度が反映されていると考えられる。さらに、父とたくやとの二者間会話はもっとも少なく（7.1%）、これは母子会話（30.4%）との顕著な違いである。話題数についても、父子間（6話題）は母子間（12話題）に比べると半数になっている。数の違いのみでいうと、父子間会話はたくやにとってあまり大きな役割を果たしていないようにもみえるが、言語環境としての質的な側面については、後の例（Example 2）で再度検討する。

2歳11か月時（Time 2）の母子三者間では、母とたくやの二者間のみでの会話タイプの数

**Table 3** Mean number of participant turns as a function of conversation type in a Mother-Child-Sibling triad at Time 2

Participant Turns	Conversation Types*		
	Mother-Child (Range)	Mother-Sibling (Range)	Mother-Child-Sibling (Range)
Mother	2.5(1-5)	2.3(1-7)	2.8(1-5)
Child	2.5(1-5)		2.5(1-5)
Sibling		2.7(1-6)	3.3(2-7)
Total Average length (in turns)	5 (50 turns/10 topics)	5 (30 turns/6 topics)	8.5 (34 turns/4 topics)
%	43.9%	26.3%	29.8%

\*There was no Child-Sibling dyadic conversation.

がもっとも多いことがわかる (43.9%)。話題別の平均会話交代数は、三者間がもっとも多く (交代数8.5)、いずれの参加者の三者間の会話交代数も、二者間と比較すると同じまたは増加している。これは2歳5か月時 (Time 1) と同様に、三者間が作り出すダイナミックスが、話者それぞれの会話への参加を促すように機能するといった傾向が、この時点でもあったと言える。話題数に関して言えば、父子の場合 (計22話題; Table 4 参照) も同様であるが、おやつ「たこ焼き」についてのサブトピックをそれぞれ異なった話題として、会話全体を細かく区別することが必要であったため、Time 1 (計12話題) よりも Time 2 (計20話題) において、言及された話題数が多くなっている。

**Table 4** Mean number of participant turns as a function of conversation type in a Father-Child-Sibling triad at Time 2

Participant Turns	Conversation Types			
	Father-Child	Father-Sibling	Father-Child-Sibling	Child-Sibling
Father	1.3(1-2)	3.3(1-9)	3.9(3-9)	
Child	1.3(1-2)		2.4(1-4)	1(1)
Sibling		3.3(1-9)	2.9(1-9)	2(2)
Total Average length (in turns)	2.7 (8 turns/3 topics)	6.5 (72 turns/11 topics)	9.1 (64 turns/7 topics)	3 (3 turns/1 topic)
%	5.4%	49.0%	43.5%	2.1%

父子間相互交渉では、父-きょうだい間の会話タイプが約半数の割合を示した。これは、母子間では母とたくやの二者間が優勢だったことと比較すると、大きく異なる点である。父は、認知的にも言語的にもかなり対等なやりとりができる、兄との会話を優先していることがわかる (会話交代数72, 11話題)。さらに、いずれの表にも示されているように、三者間でのたくやの平均会話交代数 (交代数2.4) は、二者間で (交代数1.3) よりも多くなっている上、全体

**Table 5** Proportions and success rates of the child's turns as a function of turn type at Time 1

Child's Turns	Turn Type				Total Turns*
	Join Topic	Change Topic	Initiate Topic	Continue Topic	
Proportions M-C-S	0	.05	.02	.93	44
F-C-S	.03	.06	.06	.85	35
Success Rates M-C-S	--		1		
F-C-S	1		.50		

M-C-S=Mother-Child-Sibling F-C-S=Father-Child-Sibling

\*Total Turns=Total of the child's turns

**Table 6** Proportions and success rates of the child's turns as a function of turn type at Time 2

Child's Turns	Turn Type				Total Turns*
	Join Topic	Change Topic	Initiate Topic	Continue Topic	
Proportions M-C-S	.15	.03	.18	.64	34
F-C-S	.31	.23	.08	.38	26
Success Rates M-C-S	.80		1		
F-C-S	.25		.50		

M-C-S=Mother-Child-Sibling F-C-S=Father-Child-Sibling

\*Total Turns=Total of the child's turns

の平均交代数についても三者間においての数がもっとも多くなっている（交代数9.1）。

### 会話交代のタイプ

たくやの母子三者間と父子三者間の会話交代のタイプと会話参加の成功率を、観察の2時点ごとに示したのが Table 5（Time 1）と Table 6（Time 2）である。

2歳5か月時（Time 1）では、たくやの発話のなかで、話題への加入（Join Topic）、話題の転換（Change Topic）、話題の開始（Initiate Topic）のそれぞれの割合はすべて6%以下で、他者の会話に介入していくことはかれにとってかなり困難であることが推測される。それに対して、2歳11か月時（Time 2）になるとこの3タイプすべての割合が高くなり、とくに話題への加入については母子三者間で0%から15%へ、また父子三者間で3%から31%へと増加がみられ、他者の会話に新たに加わっていくことができるようになったことがわかる（Example 3とExample 4参照）。また、たくやは母きょうだい間の会話よりも、父きょうだい間の会話のほうに能動的にかかわる傾向にあることが上記の表よりみてとれる。

たくやが能動的にかかわった会話が、そのすぐ後の他の参加者に取り上げられたかどうかは、上記の表の成功率でみることができる。ここから、母子間の場合ではほとんどが成功しており

(Time 1 ではいずれも100%, Time 2 では80%と100%), 実際には, 1 回だけ不成功になったのは, 兄がたくやの話題への介入を無視したことによるもので (Example 5), 母はすべての発話に応答している。それとは対照的に, 父子間では母親との場合と比較するとかなり低い確率でしか成功していない (Time 1 では100%と50%, Time 2 では25%と50%)。

以上のように, 発話カテゴリのコーディングの結果をみてきたが, これらの結果を支持するような相互交渉の事例を次に検討する。父母の会話スタイルの特徴とそれに対するたくやの発話をさらに詳しくみていくことで, かれの語用論的スキルの発達を, 会話データを解釈しながら検討していく。

### 母子相互交渉と父子相互交渉

2歳5か月時から, たくやが会話を開始したり話題を提供したりする場面が, 頻度は高くはないものの観察されたが, それに対する母親と父親の反応には違いがみられた。

たくやの運動会の話題の導入 (1) は, 2歳5か月時において唯一観察された「話題の開始」のカテゴリ例であった。このたくやの発話は, 第三者にはその後の母の応答 (2) がなければ, まったく聞き取れなかったほど不明瞭なものであったが, 母親は見事にかれの発話を理解してこの話題を取り上げ, その後の長い会話へと発展させた。母の質問 (4, 6) に対して, たくやは適切には答えられなかったり (5), 答えずに母に甘えるという行動をとっている (7) が, それを母親は問い詰めることもなく暗黙に受け入れ, 会話をさらに進めてたくやに理解しやすいように完全な文章にして再度質問をしている (9)。その後も, 質問—応答—確認/拡張—応答 (9-10-11-12) のような典型的な母子間会話が展開された。子どもの会話運びのスキルが不完全なこの時期において, 母親の察しと誘導によって母子間での会話の共同構成 (co-construction) を可能にし, やりとりの中で子どもは言葉の使い方を練習していけるのであろう。

#### Example 1 Athletic meet (Time 1; Mother-child interaction)

- おもちゃを使ってのひとり遊びと独り言が10秒以上続いた後
- 1 たくや: (母の方に振り向いて) うーんどーかい [?] 行ったね。
  - 2 母: 運動会?
  - 3 たくや: うん。
  - 4 母: 誰の運動会?
  - 5 たくや: よーいどん!
  - 6 母: 誰の?
  - 7 たくや: (母の方に寄って行き, 倒れそうになる) 0。
  - 8 母: (たくやを起こして) おーととと。
  - 9 母: 誰の運動会行ったの?
  - 10 たくや: かーくんの運動会。
  - 11 母: (たくやをひざの上に抱いて) かーくんの運動会行ったの。
  - 12 たくや: うん。

0=応答なし

以上のような母親の対応とは対照的に、父子相互交渉ではたくやは自分の要求を伝えるために、何度も主張を繰り返すという様子が観察された。父親と兄の間の会話（13-14）の中に、たくやはゲームをやりたいという自分の主張を挿入しようと試みるが、最初の発話（15）は取り上げられず、父親は兄との会話を続ける（16）。これは三者間会話によくある、平行して二者のみが会話を続ける例で、たくやにとっては自分の発話が無視された形で、再度の「話題の転換」をかなり執拗に続けた（17, 19）。たくやのこの主張の繰り返しは、他者の会話へうまく入っていくことができないというかれの会話スキルの未熟さを示す証拠でもあろう。父親がやっと応答しても（18, 20）、母子間で観察されたように話題が発展することはなく、父親はすぐ新聞を読み始め、たくやと兄はビデオゲームを始めることになる。たくやにとって発話の順番取りに関するこのような厳しい状況は、母子間では経験することのない会話のスキルを練

### Example 2 Video game (Time 1; Father-child-sibling interaction)

ビデオゲームをするために、父がかずやとコードをつなぐなどの準備をしている

13 父：(コードを持って) これなんだ、じゃ、これか。

14 かずや：それが×××。

15 たくや：ピコやるん×××。

16 父：(かずやに) じゃ、これ。

17 たくや：ピコやりたいんだよ、(泣き出しそうな調子で) ピコやりたい、ピコ。

18 父：なんだよ、小坊主。

19 たくや：ピコやりたいんピコやりたい、ピコやりたい [>]。

20 父：小坊主 [<] 小坊主出たよ、ピコ。

××× = 聴取不能

[>] = 次の発話と重なる

[<] = 前の発話と重なる

習する機会を提供しているものと考えられる。

### 2 時点における対象児の違い

たくやの2歳5か月時と2歳11か月時の母子相互交渉を比較すると、会話の参加能力の違いがみてとれる。さらに、子どもの言語発達に応じて母親の言葉かけにも大きな変化がみられる。

2歳5か月の時点では、言語能力を考慮して母親はたくやのペースに合わせた会話進行をおこなっていた。「色あてゲーム」の会話(Example 3)にみられるように、母親は正答を知った上で答えさせる擬似質問(mock questions)を投げかけ(21, 23)、たくやの自発的応答を待つというやりとりが観察された。「緑」についての母の質問に対して、緑がわからないたくやの当惑ぶりが無言で表現されている(31)。この間、母はたくやの自発的な応答を期待してヒントを与えて間を取っている(28, 30)。しかし、「緑」の質問に「黒」を指差しているたくや(29)に、何とか答えさせようと確認の質問(30, 34)をしているが、結局は答えを与えている(36)。このような母親の根気強い誘導が、言語能力のまだ十分ではない幼児の発話を喚起し、その中で会話への入り方や間の取り方を学習する機会を提供しているものと考えられる。

**Example 3** Color recognition game (Time 1; Mother-child interaction)

クリスマスのプレゼントに「赤いブーブー」が欲しいというたくやの発話を受けて  
21 母：(クリスマス用のおもちゃの靴を見せて) 赤って、たーちゃんどの色、赤は？  
22 たくや：(赤の部分をさして) これ？  
23 母：それ赤？  
24 たくや：うん。  
25 母：そういう色の車欲しいの？  
26 たくや：うん。  
27 母：ほんと。  
(中略)  
28 母：(おもちゃを指差して) 緑はここにある、ここどっか。  
29 たくや：(黒のおもちゃを指差し母の顔をじっと見ながら) これ。  
30 母：それ何？  
31 たくや：(おもちゃを見ながら探している様子) 0。  
32 母：(黒のおもちゃをつかんで) これ。  
33 たくや：(黒い部分に触って小さな声で) これ。  
34 母：これ何色？  
35 たくや：緑 [>]。  
36 母：じゃないでしょ [<]。

半年後の2歳11か月時では、たくやの会話の運用能力が高くなったことが顕著に示され、母や三者の同等の掛け合いが観察された (Example 4)。おやつたこ焼きについて、たくやが中のたこを嫌だと除いた (37-38-39-40) 後に、兄が自分のたこ焼きにたこが入っていないことに文句を言った (43) ことを受けて、自分にも入っていないことを主張している (46, 48)。この発話は兄の主張に触発された模倣に近いものであるが、前のやりとりの中で母親に除いてもらったにもかかわらず、「(はじめから) 入っていなかった」という矛盾に対する母の反論 (49) に対して、たくやは強く自分の主張を繰り返している (50, 53)。たくやの言動の事実上の矛盾はさておき、ここでの会話の順番の獲得や主張のタイミング、他者の発話への応答の適切性について、かれの発話は他の二者と比較してほとんど遜色はなく、この時期になって三者がほぼ対等に言語的やりとりをおこなっていることを示している。

**三者間相互交渉における子どもの経験**

三者間の親子間相互交渉において、たくやは、上記に示されたような進行中の他者の会話への介入の困難さなどを経験する。親子二者間の相互交渉では、親は子どもと直接的に向き合うため、子どものレベルに合わせた言葉かけや推察によって、連鎖的な会話を形成していくことになる。しかし、父子相互交渉 (Example 2) にみられたように、上のきょうだいを含む三者間では、たくやの発話のタイミングが悪いために、うまく会話に入れないこともあった。このような経験は複数の発話者による会話の特徴であり、子どもの語用論的スキルの獲得には重要な機会と考えられる。また、子どものスキルが十分でなく、相手の発話に完全な形で応答で

**Example 4** *Takoyaki* (octopus dumpling) filling

(Time 2; Mother-child-sibling interaction)

たこ焼きを食べていて、中身のたこについて  
37 たくや：(フォークをお皿に向けて) やーこえやだ。  
38 母：じゃあいいのいいの食べなくて(自分の口に入れる)。  
39 たくや：これもやだ。  
40 母：うんうん、わかったわかった。(口にいれ) ふ、ふ。  
41 かずや：ママ!  
42 母：はい?  
43 かずや：たこ焼きで(口の中を指して) たこが入ってない!  
44 母：たこ何てねえ。  
45 かずや：(うなずく)  
46 たくや：たくー、(大きな身振りで口を指して) 何か入ってない!  
47 かずや：入ってないぞ、(口を指して) これ。  
48 たくや：入ってないよ、(指して) これ。  
49 母：入ってたでしょう。  
50 たくや：入ってないよ。  
51 かずや：僕も入ってなかった。  
52 母：本当  
53 たくや：たーちゃんのも入ってなかった。

**Example 5** The number of octopus dumplings eaten

(Time 2; Mother-child-sibling interaction)

父親の食べたたこ焼きの数を、母親に報告していて  
54 かずや：僕、これで3個目だもん。  
55 母：ほんと、ふーん。  
56 かずや：たーちゃんはこれで何個目。  
57 たくや：[>] ねー。  
58 かずや：たーちゃん [<] はこれで3個目。  
59 母：本当? [>] ふーん。  
60 たくや：ねー。 [<] ねー、ねー。

きなくても (Example 5), 他者の会話 (54-55, 58-59) に単に同意を表明する (57, 60) ことで、参加することを容易にしている。このような形での参加は、たくやにとってもそれほど困難ではなく、言語能力の未熟なけれど、社会的相互交渉の一端を担い場面に参加しているという意識をもつことで、その後の対話への参加意欲と自己効果感をもたせることになると考えられる。

## 考 察

本研究は、母子三者間および父子三者間相互交渉における、下の子どもに対する親のこぼかけと子ども自身の会話運びのパターンや言語使用を2時点で観察し、語用論的スキルの発達過程と子どもの言語的社会的意義を考察することを試みた。2時点のいずれにおいても、三者間での会話が二者間会話よりも長く継続し、たくやの平均会話交代数も三者間において多いことがわかった。これは、Barton and Tomasello (1991) の研究で、19か月児が参加する会話でさえも、三者間でのほうが二者間の3倍の長さの会話を維持することができるという結果と同様の傾向を示している。ただし、前述したように、実験室での観察手続がこの高数値を引き出している可能性を考慮すると、自然観察に基づいた本研究はかれらの結果を十分に支持したものであったと考えられる。このような結果が得られた理由はさまざまに推察されるが、例えば、三者間相互交渉において、母一きょうだい間のやりとりはたくやにとって良いモデルとなると考えられる。やりとりをそばで聴いているという間接的参加の状況から、たくや自身が加入したいと感じたときに何らかの意思表示をし、かなりの確率で受け入れられるとすれば、それは会話加入の訓練の機会となる。さらにそれがより長い会話へと発展する可能性があれば、たくや自身の自己効果感の獲得にもつながるものと考えられる。

次に、たくやの3つの会話タイプ（話題への加入、話題の転換、話題の開始）の生起頻度が2歳5か月時（Time 1）では低かったのに対して、2歳11か月時（Time 2）では増加したことがわかった。これは、他者がそれぞれの視点や意思をもつことをたくやが理解できるようになり、そうした視点で進行中の他者間の会話を聴いて、適切に会話に加入する試みができるようになったことを示している。しかし、結果として表れた数値はそれほど高いものでなかったことから、他者の意思を十分に考慮してそこに自律的、積極的にかかわるには、まだたくやは不安定な時期にあると考えられる。

母子間および父子間相互交渉を比較して言えることは、三者間相互交渉で母のたくやとの会話に従事する割合が兄との会話でよりも高い一方、父親は兄との会話を優先させる傾向が示された。このように、母親と父親ではそれぞれの子どもへのかかわりやこぼかけに質的、量的な違いがみられ、子どもは結果的に異なる言語環境にさらされることになる。とくに、言語学的にみて未熟な下の子どもについては、このような多様な環境に接することが、社会的相互交渉のスキルの獲得に重要な機会を提供していると言える。さらに、父母のたくやへの対応を比較すると、たくやの会話への参加が母親にはほとんどの場合成功するが、父親に対しては成功率が低くなり、話題が無視されることが多いという結果が示された。このことと、たくやが父と兄の会話により多く加入したという結果を考え合わせると、たくやは働きかけのほとんどを取り上げる母親の場合よりも、無視される可能性が高い父親のほうに多くかかわる試みを

したことになる。

こうした現象を説明する1つの要素として、父母のたくやに対するかかわり意識の違いが考えられる。母親に対しては積極的に介入しなくても、意思表示を読みとって対処してくれることが期待できる。それとは対照的に、父親はたくやの行動傾向や言語的スキルなどを熟知しない分、たくやが積極的で明確な意思表示をしなければ自分に注意を向けさせることができない。母親の相互主観的なかかわりは子どもの自己効果感を高め、自由に発言しようとする意識や動機づけを形成する。また、父親の対応は、子どもが自分の要求を明確に伝え、他者からの適切な応答を引き出すための多様な語用論的スキルの獲得につながる。これらの会話参加の意欲と言語能力の獲得は、その後の子どもの言語的発達や社会性の発達につながるものと考えられる。

このような三者間相互交渉の中での経験とそこで培ったスキルは、他の家族、仲間、学校などの、外の世界で直面する多数話者によるさまざまな会話場面において、会話を適切に展開し維持していく上で、欠くことのできないものとなろう。二者間相互交渉では、発話の発信先はほとんどの場合明確であり、その内容も参加者が理解できる範囲にあることが想定される。ところが、われわれ人間が日常生活の中で実際に接する多くの発話は、その発信先も話題も参加者やそのダイナミックな関係などで、いかようにも変更されるものである。そうした発話に適切に対応し、会話として維持しかつ発展させていくためには、多数の発話者による会話環境でのさまざまな経験をつむことが必要である。

これまでにみてきた会話の参加スキルが、たくやのその後の社会性の発達や言語的社会化の過程の中でどのような役割を果たし、どのように展開していくのかを知るために、将来的には言語能力がさらに豊富化、精緻化していく3歳代以降のデータを加え、さらに分析を拡張していく必要があると考える。

## 文 献

- Barton, M. E., & Tomasello, M. (1991). Joint attention and conversation in mother-infant-sibling triads. *Child Development*, 62, 517-529.
- Barton, M. E., & Tomasello, M. (1994). The rest of the family: The role of fathers and siblings in early language development. In C. Gallaway & B. J. Richards (Eds.), *Input and interaction in language acquisition*. (pp. 109-134). Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, R., & Bellugi, U. (1964). Three processes in the child's acquisition to syntax. *Harvard Educational Review*, 34, 133-151.
- Dunn, J. F., & Shatz, M. (1989). Becoming a conversationalist despite (or because of) having an older sibling. *Child Development*, 60, 399-410.
- Gallaway, C., & Richards, B. R. (Eds.) (1994). *Input and interaction in language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodz, N. S. (1989). Parental language mixing in bilingual families. *Infant Mental Health Journal*,

- 10, 25-44.
- Jones, C. P., & Adamson, L. B. (1987). Language use in mother-child-sibling interactions. *Child Development*, 58, 356-366.
- Mannle, S., & Tomasello, M. (1987). Fathers, siblings, and the bridge hypothesis. In K. E. Nelson & A. van Kleeck (Eds.), *Children's Language*. Volume 6 (pp. 23-41). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Ninio, A., & Snow, C. E. (1996). *Pragmatic development*. Boulder, CO: Westview Press.
- Ochs, E. (1982). Talking to children in Western Samoa. *Language in Society*, 11, 77-104.
- Ochs, E. (1986). Introduction. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across cultures*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Oshima-Takane, Y. (1988). Children learn from speech not addressed to them: The case of personal pronouns. *Journal of Child Language*, 15, 95-108.
- Oshima-Takane, Y., Goodz, E., & Derevensky, J. L. (1996). Birth order effects on early language development: do secondborn children learn from overheard speech? *Child Development*, 67, 621-634.
- Schieffelin, B. B. (1986). Teasing and shaming in Kaluli children's interactions. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across cultures*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Strapp, C. M. (1999). Mothers', fathers', and siblings' responses to children's language errors: Comparing sources of negative evidence. *Journal of Child Language*, 26, 373-391.
- 上村佳世子・加須屋裕子・濱部浩一 (1999). 父子相互交渉における働きかけのスタイル. 文京女子大学研究紀要, 1, 63-76.
- Woollett, A. (1986). The influence of older siblings in the language environment of young children. *British Journal of Developmental Psychology*, 4, 235-245.